

FDニュース

発行日 2012年 7月 12日

目次：

国際グッドプラクティス P.1

レッスンシェア P.2

授業評価アンケート P.4

集計結果



1. 国際グッドプラクティス

今回は、川副令 助教の「国際法概論」の第11回目「国家機関の役割と免除の制度」の授業に参観しました。「国際法概論」は半期科目であり、総合政策学科の2年生以降が履修できる選択の専門科目です。「国際法概論」では、国際社会の出来事を法的な観点から考察すること、そして国際法の初歩を学ぶことが授業の目的となっております。

(インタビュー:長嶺宏作)



質問(長嶺宏作助教)：「国際法概論」の授業ですが、法学はとにかく難解な専門用語が多いですね。

回答(川副令助教)：はい、法学用語も難しいのですが、さらに国際法になるとさらに対象となる出来事が一層抽象的になりやすいですね。授業ではできるだけ具体的な事件などの話をして、それに国際法の立場から説明を加えて、抽象的な話にならないようにしています。

Q：今日、参観した授業でもシリアのトルコ機の撃墜事件に関する新聞記事から授業に入っていましたね。

A：毎回、授業では最近の話題を積極的に取り入れて、それと国際法の接点について説明するようにしています。何気ないニュースの中に、「〇〇条約の何条によって云々」という一文が出てきたりします。その意味について説明することで、授業に具体性やある種のライブ感覚を持たせようと考えています。

Q：今日は、対外的な行為をなしうる国家機関(外交使節など)についてと、外国の領域内で国家機関が享受する特権や免除についての授業でしたが、その話に入る前に前回の授業のテーマを簡単に確認し、今後の講義計画も示したうえで授業に入るというのは、分かりやすかったですね。

A：授業では、講義計画を繰り返し学生に伝えるようにしています。それから、毎回レジュメを準備して配布し、授業のキーポイントは分かるようにしてあります。ただし、ノートを取らなくてもわかるようなレジュメには敢えてしていません。それは学生が考えて授業を受けなくなってしまうからです。あくまでポイントだけでA4一枚程度のものです。

Q：授業では、各話題30分ずつぐらいになるよう時間配分にも気を使われていましたが、その点は特に意識されているのですか？

A：あまり厳格に守っているわけではないのですが、各回の授業を30分×3ぐらいに区切ることで、教える側も学生の側も頭の整理がしやすいかと思って、意識するようにはしています。

Q：また、前回中間テストということでしたが、何を目的に行われているのですか？

A：いきなり期末試験だと、勉強することの量も多く、とっかかりがつかめなくなってしまう学生もいるのではないかと思います。私自身が学生のときそうでした(笑)。中間テストをすることで、改めてどういったことを重点的に勉強すればいいか、学生に伝えられるのではないかと思います。

Q：今日は授業で外交特権の話をしていましたが、その中で「ペルソナ・ノン・グラータ(好ましくない人物)」の通告に関する話が出てきました。この通告を受けた外交官は派遣先の国から退去しなければならないということでしたが、私も、この授業のペルソナ・ノン・グラータになっていないか実は危惧していました(笑)。大丈夫だったでしょうか？

A：とんでもない。自分の授業について考え直す機会にもなりましたし、むしろ感謝しています。



2. レッスンシェア：大人数授業の工夫

「レッスンシェア」では、学部と短大に共通する課題を特集して、各教員の取り組みを紹介します。第3回は大人数授業を考えたいと思います。大人数の授業では少人数授業よりも授業評価アンケートで低い評価結果が出ており、工夫が必要なところです。そこで3人の先生方（加藤洋子教授、浅川道夫准教授、東馬宏和准教授）の取り組みを紹介したいと思います。

① 歴史を学ぶ楽しさを教える：加藤洋子教授

質問（長嶺宏助教）：「世界近現代史」は1年生の必修科目で受講人数も多いということですが、苦勞されていますか？

回答（加藤洋子教授）：「世界近現代史」の場合、世界史に関心をもっている学生だけが履修しているのであれば、人数が多くても授業はやりやすいだろうと思います。しかし、必修となると「世界史は嫌い」あるいは「全く関心ない」という学生もいます。そうした学生が受講者に多い場合には、授業に一段の工夫が必要になります。どのようにしたら、話す内容に学生の関心を引きつけることができるのか。今日に至っても試行錯誤の連続です。

Q：どのような試みや工夫をされているのですか？

A：これまでの経験から、私の場合は授業において、（1）現在や将来の動向の中で、過去（その日の授業テーマ）がどのような意味をもつのか説明する、（2）その日のテーマのエッセンス中のエッセンスを（1）の観点から選び、それに絞って話を進める、（3）さまざまな材料—映像、写真、音楽、グラフなど—を使って多面的に理解できるようにする、といった点に注意をはらっています。

歴史とは、「過去と現在との間の対話」であり「過去の諸事件と次第に現れてくる未来の諸目的との間の対話」である、とE. H. カーは述べています。今日のように、情報技術革命下で世の中が激変しつつあるときには、（1）と（2）は若者に過去・現在・未来に何らかの見通しを与える点で、とても大事と思っています。また、どのように焦点を絞って話そうかと、毎回、検討することは、私にとっても勉強になります。（3）に関しては、近年のネット上の爆発的な資料の増加により、授業も以前とは様変わり。日々、あらたに出てくる資料を授業に取り入れていくのは、楽しみでもあります。

大きな教室で人数が多いと、後ろのほうでおしゃべりをする学生も出てきますが、そのような場合には、注意するほか、学生に教科書を読ませる、あるいは、質問をする、書かせる、映像を見せて気分を転換させる、といった工夫もします。

Q：大人数の授業だと学生の能力差をどのように配慮するのかという難問がありますが？

A：世界史が好きな学生と、世界史が嫌い、あるいは関心がない学生の双方がいても、どの学生にも、今日や将来の問題が過去とどのようにかかわっているのか、ということについて知識を得て、自分なりに考え、対応できるようになってほしいと思います。例えば、最近の世界の経済情勢と国際関係は、1929年の大恐慌について学ぶことで、より深く理解し、対処できるようになります。もし、こうした問題について何らかのヒントを得て、学生が考えるようになったら、授業のかなりの部分で成果があったと思います。

授業で話す内容に、どれだけ詳細な情報を組み込むのかは、学生がどれだけ、その題材に関心を持っているのか、ということに関係してきます。もし、世界史の好きな学生ばかりでしたら、かなり詳しいことにまで言及しますが、詳述しなくても論点を理解してもらえよう、いろいろ工夫を重ねています。

Q：学生に伝えたいことや授業への抱負があれば、お聞きしたいのですが？

A：どの若者にも未来があり、その未来が豊かなものであってほしいと願っています。今日のような激変期には、過去・現在・未来の見通しをもつことが肝要ですので、「歴史の教訓」が彼らの人生に何らかの役に立つことがあれば幸いです。

（インタビュアー・長嶺宏作）

② 分りやすさの追求：浅川道夫准教授

質問（井上桂子准教授）：「国際政治学」の授業を拝見しましたが、授業の到達目標はどのように示していますか？

回答（浅川道夫准教授）：国際政治の動向をしっかりと理解できるようになる。国際政治の動向を見る基礎力を目標にしています。高校生の時の選択が違いますし、旧学科は全学科の学生がいますから、国際政治専攻ではない学生も多いです。ですから、学生の政治、世界史の知識、また関心度もばらつきがあると感じています。

す。講義していて、手ごたえで学生が理解しているかどうかはわかりますから、用語、キーワード等言葉の説明は丁寧にします。しかし、授業では一つ一つの事例を細かくやるのではなく、現在の国際動向の仕組み、基礎に力を入れています。



Q：多人数授業の進め方で留意されていることは？

A：3，4年生の中には単位がほしくて選択した学生も多いはず。割合は3，4年生が6割以上。それでまず、彼らを授業に向かわせることを考えました。パワーポイントなど視覚、聴覚機材を使った授業もよいと思いますが、私の授業は学生自身にノートを取らせるということに重点を置きました。期末試験はノートのみ持ち込可、ということにして、とにかくノートを取りなさい、と奨励しています。私は赤、青、黄のチョークを駆使してひたすら板書の毎日です（笑）。

Q：関連した授業の先生方と話し合いを持たれていると聞きましたが？

A：そうです。昨年からののですが、政治学、戦略論、平和学など関連する授業の吉本隆昭教授、鄭勛燮准教授と私の三人で集まって、授業の内容や進め方、重点について互いに意見を交換し、連携をとっています。

Q：最後に施設面など、要望はありますか？

A：この授業の旧カリの名称は「国際政治学入門」です。入門ということで、ウエートを基礎に置いています。入門というカテゴリーだけなら15コマでもよいと思いますが、グローバルに活躍する人材を育成するという目的からいうと、個人的には通年・30コマあった方がよいと思います。基礎だけでなく、具体的事例ももう少し細かく扱えますから。公務員試験講座でも、いま以上に知識が役立つことになるだろうと期待がもてます。

また、受講者に見合った教室が確保されていないというのも問題だと感じています。授業内容、受講者、施設のバランスの検討が必要だと感じています。



（インタビュー・井上桂子）

③ 学生との会話を作る：東馬宏和准教授

質問（雨宮史卓教授）：商経学科において一年生全員が受講する必修科目である「経済学原論」、どのように授業を進めていますか？

回答（東馬宏和准教授）：少人数のクラスでも行っていますが、クラスの規模に関わらず出席をチェックするために、毎回、短冊を配布し、授業の終了後に回収しています。配布するときも一人一人に手渡しして、学生の顔を見て挨拶するように心掛けています。そうすることで、その日の学生の状況を把握する事が可能になります。

Q：なるほど。学生とのコミュニケーションも取れますし、他の授業で短冊を不正使用したり、代返をさせない予防策にもなりますね。しかし、大人数だと、とても手間がかかるのではありませんか？

A：確かに手間がかかりますが、短冊の利用はとても効果があります。出席のチェックの他に、短冊の裏に授業の終了までに授業の感想等を毎回書かせております。これは、10年以上継続して行っています。

Q：具体的に、学生はどんな内容を短冊の裏に書いてくるのですか？

A：短冊には、授業の感想、質問、改善してほしい点等を自由に書くことを許可しています。学生からのレスポンスとしては、授業についてよく分かった点、わからなかった点、授業中教員が改善してほしい点、他の学生への要望、教室環境への要望、まれに個人的な相談を書いてくる学生もいます。授業時間中の質問にも、もちろん対応しますが、近年では、手を挙げられない学生、質問が明確にできない学生もいますので、短冊への質問の記入はとても有効であると思われます。

Q：先生は、学生からのレスポンスに対して、どのように対応していますか？

A：授業内容に対しての質問が多い内容は、その都度、次の授業時間の前半を使って再度分かり易く解説しています。また、小テスト等も行い、学生の理解度を常にチェックするように心掛けてます。小テストの結果は商経学科の研究室で希望する学生に点数を教えて、自分がどれぐらい理解できているかを把握させるようにしています。また、個人的な質問に対しては、学科研究室で相談にのるようにしています。ごく希な事ではありますが、学生相談室の利用を促した事もありました。

Q：お忙しい中、どうもありがとうございました。

（インタビュー・雨宮史卓）



3.H23年度後期授業アンケートの集計結果について

表1 国際関係学部 科目区分別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.22	4	0.81
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.31	4	0.74
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.32	4	0.77
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.29	4	0.76
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.2	4	0.81
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.18	4	0.84
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行なわれた。	4.2	4	0.76
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	4.09	4	0.88
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.18	4	0.82
10. 教員は授業の開始・終了の時間を守った。	4.3	4	0.78
11. 私語や途中入退出が少なく、授業に集中できる環境であった。	4.18	4	0.86

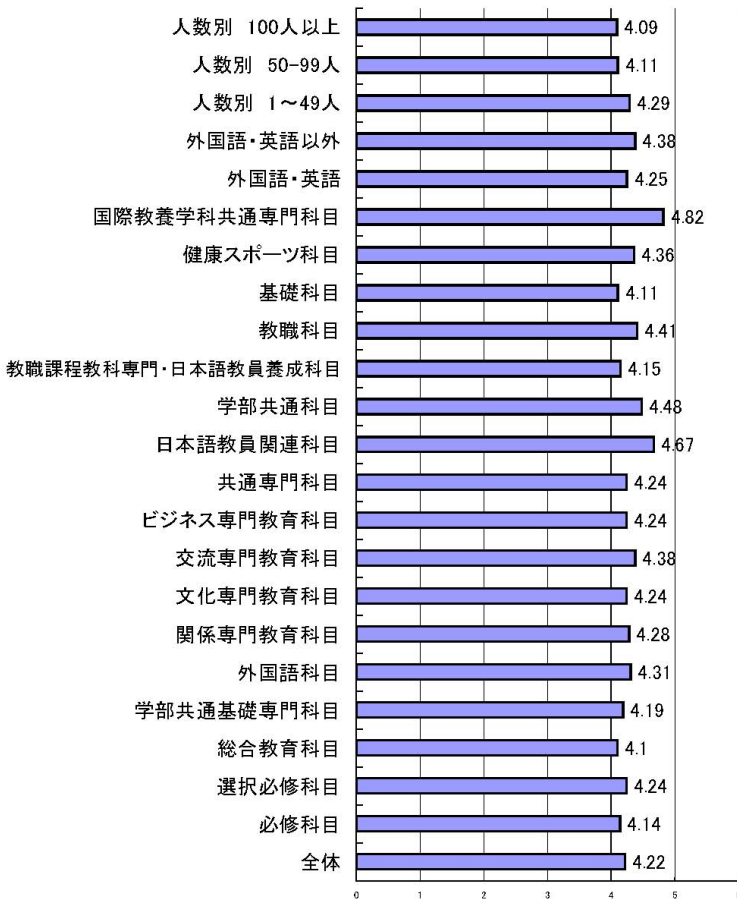


表2 大学院国際関係研究科 科目区分別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.5	5	0.69
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.72	5	0.45
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.5	5	0.6
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.61	5	0.59
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.44	5	0.68
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.5	5	0.76
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行なわれた。	4.56	5	0.68
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	4.56	5	0.5
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.28	4.5	0.8
10. 教員は授業の開始・終了の時間を守った。	4.5	5	0.69
11. 私語や途中入退出が少なく、授業に集中できる環境であった。	4.72	5	0.45

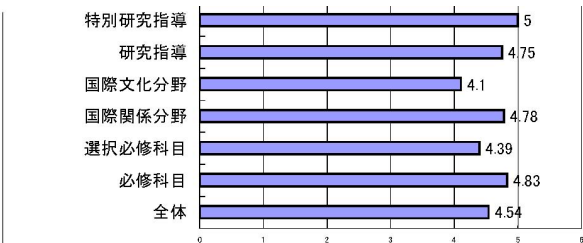
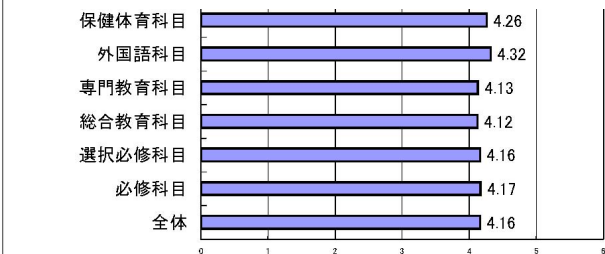


表3 短期大学部 科目区分別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.17	4	0.71
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.26	4	0.68
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.26	4	0.71
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.23	4	0.69
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.15	4	0.72
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.14	4	0.73
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行なわれた。	4.13	4	0.69
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	4.04	4	0.79
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.09	4	0.75
10. 教員は授業の開始・終了の時間を守った。	4.18	4	0.78
11. 私語や途中入退出が少なく、授業に集中できる環境であった。	4.11	4	0.79



国際関係学部授業評価アンケートのH23年度後期の全体平均は4.22でした。経年変化をみると、H21年度前期が4.1、後期が4.2、H22年度前期が4.2と後期が4.3、H23年度の前期が4.17と変化しています。全体の推移としては、ほぼ横ばいとなっております。

短期大学部のH23年度後期の授業アンケートの全体平均は4.16でした。経年変化をみると、H21年度の前期が3.9、後期が4.1、H22年度の前期が4.0、後期が4.1、H23年度の前期が4と変化しています。短期大学部は前期に必修科目が多いこともあり、前期よりも後期の方が授業評価の結果が高くなる傾向が続いています。

各教員におかれましては、授業評価アンケートの結果を授業改善に役立てていただければと思います。また、昨年度から数字だけでなく、学生の声が分かるように記述式の質問紙を1枚増やしました。しかし、回収方法の煩雑さやアンケート量の多さなどの問題が指摘され、FD委員会ではさらなる改善を議論いたしました。その結果、アンケートを一枚に戻し、質問項目を減らし、記述できるスペースを作成しました。本年度も教員の皆様方には、ご協力をお願いし、授業改善の手助けとなるようなアンケートにしたいと考えております。

(文責・東 和敏)

FDニュース

発行者：日本大学国際関係学部

FD委員会

FD委員会委員長：東 和敏

FDニュース小委員会：

長嶺宏作・井上桂子・雨宮史卓・太田尚子

2012年7月12日発行